みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

地球市民の先駆か、世界の孤児か：各個研究：グローバル化時代におけるディアスポラ―無国籍者とボーダーに関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5254

PROJECT

プロジェクト

地球市民の先駆か、世界の孤児か

各個研究：グローバル化時代におけるディアスポラ ——無国籍者とボーダーに関する研究

文・写真 陳　天璽

グローバル化と人の移動

現代は移動の時代といわれている。グローバル化の進展にともない、国境を越える人の活動は激しさを増している。短期のものでは、ビジネス出張や海外旅行、そして長期であれば留学や駐在など、国境を越え海外に行くこと、また海外で暮らすことは人々にとって身近な出来事になっている。

現在、故郷を離れ海外に居住している人、つまり移住者は1億7500万人にのぼると推測されている。全世界の人口が63億人だとされる今日、100人に3人が移住者であるということになる。歴史的に見ても、この数は過去最高であり、移住者の数とその全人口に占める割合は増加の一途をたどっている。

このように、国境を越える人の移動が頻繁化したことは、経済や情報のグローバル化に起因する。グローバル化にともなう、国境を越える金やモノ、情報の迅速な流通、そして越境者の増加は、世界があたかもボーダーレス化しているような錯覚をわれわれに与える。たとえば、2004年5月、これまでの欧州連合（EU）に中東欧など新たに10カ国が加わり、25カ国体制の「大欧州」が誕生した。かつて冷戦下で東西ブロックに分断されていた国々でさえ、新しいボーダーでひとつに括られ、その域内の移動は自由になった。域内の隣国まで通勤する「越境サラリーマン」の生活も、国境の意味が薄まっていることを印象づける。ヨーロッパだけではない。便利な国籍をいくつも取得して、ときにはオーストラリア人として、またときにはマレーシア人、はたまた福建人として、自分が有している複数の国籍、暮らしてきた土地、そして身につけている言葉や文化を柔軟に活用し、世界を舞台に活躍している人たちがいる。彼らからも、ボーダーレス化した社会がうかがえる。その一方、国境を越える移動の結果、国々の法律のはざまで、無国籍者となり、どの国の国民としての権利と義務も持たないまま生きている人もいる。

EU拡大後、手続きが簡略化されているデンマークの入国審査。

国籍・国境がもつ意味の再考

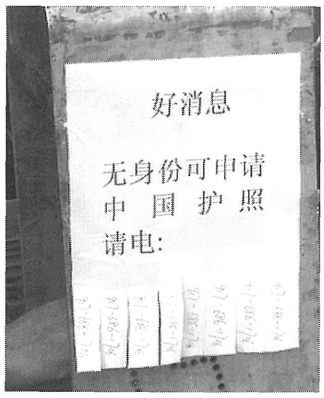
グローバル化により国境が意味を薄めているかといえば、決してそうではない。しかし、人々の移動の実践により、個々人にとっての国境や国籍の意味は確実に変化している。また個人のアイデンティティが依拠するものも変わってきている。これについては、グローバル化している現代社会と、それ以前の近代とを比較することによって、より理解しやすくなるであろう。

近代は、国民国家を形成することを最も重要な目的とした時代である。強い指導者の手で、国家を形成し、メンバーに国籍を与えることによって、排他性を持つシステムを作りあげた。近代の民族主義者が追い求めていたものは、自民族が生存する空間や領土であり、彼らはそれを国家とし、メンバーを組み入れることで、人々のアイデンティティを領土化した。

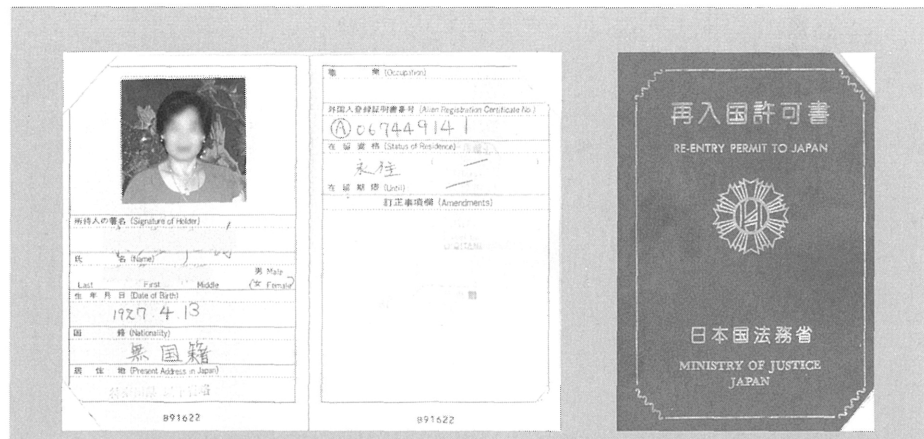
これに対して、グローバル化時代のアイデンティティは、ニューヨーク、東京、上海、パリなどコスモポリタン都市のつながり、利益や信条、エスニシティ、消費物、生活様式などによって形成される。しかも越境者の多い現代は、かつてのようにアイデンティティ形成にとって領土が最も重要な要素であった時代とは異なっている。また国籍も、国家のメンバーシップやアイデンティティの証明であった時代から、いまでは越境するためのツールとしての機能が重要視されるようになっている。国家が定める国境や国籍の機能自体に大きな変化はないが、グローバル化にともない、人々のそれらに対するスタンスや関わり方がより主体的、そして柔軟になっているといえよう。

私は、こうしたグローバル化社会において越境する人々、なかでも華人ディアスポラと無国籍者に興味を持っている。彼らはなぜ移動し、そしていかなるアイデンティティをもっているのか。彼らにとって、国籍や国境が持つ意味とはなにか。また、彼らのような帰属がはっきりしない個人にとって、国家とはどのような存在であり、彼らとどのような関係性にあるのか。

こうした問いをひとつひとつ解明することを通じて、グローバル化時代のトランスナショナルなアイデンティティのあり方について考察することが、このプロジェクトの目的である。



「耳寄り情報　身分証のない人でも中国パスポート申請できます。電話でご連絡ください」という広告。（ニューヨークにて）



日本に在住する無国籍者にとって「パスポート」代わりとなる再入国許可証。

越境者とともに移り変わるフィールド

私が対象としているディアスポラや無国籍者たちは、移住先国のマイノリティとして位置づけられてきた。そして彼らは、移民として国家のマジョリティである国民とは区別された。国家は、国境によって区画された領土に規制を加え、国民には国籍を与えることで権利と義務、そして帰属意識を保持させた。一方、移民に対しては、法的、社会的なボーダーを定めることによって、彼らを規制・管理した。

研究においても、これまで、移民という現象は、受入社会における移住者の新しい社会的・文化的環境への適応の問題として取り組まれてきた。そして人類学者の研究対象は伝統的な共同体が中心であり、移住者の母社会である伝統社会の研究から出発することが常態だった。（前川 2004）しかし、人の移動の激しいこのグローバル化時代において、人の動きはかつてのように、伝統社会から受け入れ社会への一方向ではなくなり、複雑化している。移住先との関係も、かつての移民集団と比べると契約的なものになってきている。つまり、一つの目的地に移住したとしても、それは暫時的な移住であり、その地に骨を埋める形で移住するというものではない。いったん移民権を取得しても、一定の貯金をためるなど目的を達成すると、また移住元に戻って生活したり、状況の変化によっては新しい目的地へ移動するといった形態の移住をしている。いうならば、現代の移住者は、一定の場所に定着するというよりも、複数の地域を往復し、または新しい地へ移動しつづけるのが特徴である。よって、これまでの人類学者が行ってきた、特定の地域を長期間調査するような固定的なフィールドワークとは違い、越境する研究対象の営みを追って、フィールドを変えることもあれば、複数の社会をフィールドとするなど、新しい研究手法が求められている。

地球市民の先駆か、世界の孤児か

ディアスポラや無国籍者を、一国家のメンバーとして認識することは難しい。

とくに無国籍者は、人の国際移動が増えるなか、各国の国籍法の相違や国際関係の変動の結果、どの国からも市民権を与えられずにいる。UNHCR（国際連合難民高等弁務官事務所）は、無国籍者は世界に数百万人いると推測し、彼らの地位と権利を守ることを急務としているが、国が作る法の隙間からこぼれ落ちたこれらの無国籍者は、国家の保護もなく、移動の自由や法的権利が享受できないまま生きている。

「日本人男性と結婚すれば、すぐ日本国籍がとれるの？」と問いかける越境者たち。（ニューヨークにて）

しかし反面で、彼らが国家の権益を守るという義務を負っていないことも事実である。国の利益を守ることは、場合によっては、エゴのむき出しとなり、国家間の衝突や破壊につながることも忘れてはならない。たとえば、国民である人たちは戦争などが起きれば、それに加担することになる。

国家の矛盾や限界を体感してきたディアスポラや無国籍者は、国家の枠組みを超えた視点で世界を見つめることができる人々なのかもしれない。彼らをマイノリティとして、国家の中の問題として埋没させるのではなく、そこに秘められた世界観を見ることで、グローバル化する現代社会に生きる人のあるべき姿を見出せるかもしれない。

彼らが持つアイデンティティを見つめることを通し、彼らが地球市民の先駆であるか、それとも、国家のはざまで苦悩する世界の孤児であるのか、その可能性と限界を明らかにしていきたいと思っている。

参考文献

John Torpey. 2000. *The Invention of the Passport: Surveillance, Citizenship and the State.* Cambridge University Press.

前川啓治 2004『グローカリゼーションの人類学』東京：新曜社。

ちん てんじ

先端人類科学研究部・助教授。
無国籍者、ディアスポラなど移動・移住者と、国籍、国境、グローバル社会のダイナミズムを研究。
著書に『華人ディアスポラ』（明石書店 2001年）、「グローバル時代に求められる新しいアイデンティティ」『世界と議会』2003年2月号（（財）尾崎行雄記念財団 2003年）などがある。